

特集：入学

薄暮の自転車

桑原 朋彦（筑波大学 生命環境系）

新入生のみなさん、入学おめでとうございます。今年の桜はつくばの風にも耐え、比較的長く咲いていたようです。私の住む北条の町には「りんりんロード」、「北条大池」と、桜の名所が2つもあり、今年は心ゆくまで桜を楽しみました。りんりんロードの桜並木を散歩している時に、山間から雲が流れ出てくる場所に出くわしました。山登りには珍しくない光景ですが、何分私は街中で育ったものですから、生活空間でこういうことが見られたのにはちょっと感動しました。

私は名前を朋彦といいます。父は昌彦で、母から「お父さんが日を重ねて昌だから、あんたは月を重ねて朋だ」ということを聞いたことがあります。だから父は鬱っぼいのに日が2つもあるので明るく、自分は月が2つもあって心配性だけど、鬱ではないんだ、と妙に納得しました。ただし、心配性と鬱を関係付けるのは根拠がないかも知れません。世の中には根拠があるないに関わらず、なんとなく納得することがあります。

心配性が年をとると良いことがあります。もの忘れのため、心配していることを忘れるので心配が長続きしないのです。ただし、この幸せな状態は、もの忘れに起因するので、他人に迷惑をかけることがしばしばあります。あの人はああいう人だと諦めてもらえるとうれしいのですが……。心配性なもの忘れは、自分が気がついたことを忘れることを心配します。だから、目に見えるところに付箋をべたべたと貼って書きとめる事になります。

「自転車のライトは、周りがよく見えるために点けるのではありません」。それでは何のために点けるのかというと「車の運転手からよく見えるために点ける」のです。光があれば何かいる

ことがわかります。そのところがわかっていない人があまりに多い、そういう人は薄暮（はくぼ、季節と天候によって時間帯がずれるが、春ならば午後の6時ころ）にはまずライトを点けません。実はこれが最も危ないという人もいます。薄暮というのは視野と意識がずれていて、明るいけれども見えていないことが起こり得る危険な時間帯です。この時間帯はそこそこ明るいので、自転車側は車から見えているに違いないと思うかもしれませんが、必ずしも見えていないのです。車側も見えていると思っていますが、なんとといっても運転中です。動きがはっきりと認識されない場合には、自転車がいることに気が付かないことがあるのです。要するに、気をつけようという意識がないので、見えない状態が生じています。

新入生のオリエンテーションでは自転車の使用に関して、ペDESTリアンでの注意や駐輪の仕方など、公共のマナーばかりが注意されていました。しかし、乗っている本人の安全のために、薄暮でライトをつける、ということは言われていなかったように思います。何せ、私は心配性でもの忘れなので、何かの機会に伝えておかなければと思っていたところに、この文章を書く機会をいただいたので、忘れないうちにと書きとめました。事故などにあうことなく、思う存分4年間勉学に勤しみ、講義、実験、そして実習中に感じた些細な驚きを自分の中で大事にしてみたいと思っています。

Contributed by Tomohiko Kuwabara, Received April 24, 2013.

